

カトリック 仙台教区報

No.255 2024年9月29日

発行：カトリック仙台司教区
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel. (022)222-7371 Fax. (022)222-7378
発行責任：仙台教区広報委員会
URL <http://sendai.catholic.jp/>

日ごろの小さな平和の輝きから栄光へ 聖母被昇天ミサ



聖母被昇天を祝う8月15日、仙台司教区カテドラルである元寺小路教会では、午後6時から、ガクタンエドガル司教が主司式、イグナシオ・マルティネス神父、高木健太郎神父、シャルル・エメ・ポルデュック神父が共同司式で荘厳に行われた。

まず、司教が、聖母マリアの被昇天を祝うと同時に、今日は終戦記念日でもあります。平和旬間を締めくくる今日、この戦争で亡くなられた多くの人のことを記憶し、私たちの心が平和への願いと決意で一つになるように祈りましょう、と挨拶され、ミサが始められた。

この日は、日曜日ではなかったが、夏休みで、里帰り中の信徒もミサに参加し、大勢の信徒が熱心に感謝と賛美の祈りをささげた。

ガクタン司教の説教

第1朗読 黙示録 11・19a、12・1-6、10ab

第2朗読 一コリント 15・20-27

福音朗読 ルカ 1・39-56

第1朗読では、一人の女性が登場します。この女性は、輝かしい勝利をおさめているようですが、同時に苦しんでいます。生みの苦しみを味わっている

のです。陣痛の苦しみを経て、彼女は完全に神の輝きをまとい、完全に神のうちに生き、神の光に包まれています。

冠の12の星は、彼女がイスラエルの12部族、神の民全体、聖徒の交わりによって、とりかまれていることを象徴しています。彼女は教会をも表しています。教会は、喜んだり、悲しんだりします。どんなことがあっても、教会である私たちが心を一つにして、旅をし、永遠の喜びにはいることを希望しています。

福音は、マリア様が親類のエリサベトを訪問する場面です。これは、マリア様は自分がイエスを宿すことを天使から告げられた後の出来事です。この場面には、喜びに満ちた二人の女性が立っています。一人は、年を取っており、子どもを育てていく不安も抱いていたでしょうが、声高らかに喜びを表しているエリサベト！ もう一人は、長い旅で、どんなに体が疲れていても、喜びを歌っているマリア！「わたしの魂は主をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます」。

「力ある方」、すなわち神が、自分に偉大なことをなされたことを実感している二人が、喜びを分かち合っているのです。これも、生きている教会の姿です。

私たちの人生に、そして私たちの教会に悲惨なことがたくさんあります。しかし、神の約束は確かに私たちの中で実現に向かっていて、と私たち教会が信じてこの旅を一步一步前に進めています。

聖書に記されているマリア様の姿は、いわば神への信頼と日頃の戸惑いといった二重性の谷を貫く歩みでした。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい」という天使のお告げに対して、マリア様の答えは、「どうして、そのようなことがありえましょうか。わたしは男の人を知りませんのに」、といった戸惑い。

12歳のイエスが、両親と共にエルサレムでのお祭りからの帰路の途中、団体と一緒にいなかったことに気づいたマリアと夫ヨセフは、エルサレムに戻り、イエスを捜しに行きました。イエスを見た時、驚いて、マリアは息子に、「なぜこんなことをしてくれたのです。ご覧なさい。お父さんもわたしも心配して捜していたのです」と言いました。イエスの答えは、「どうしてわたしを捜したのですか。わたしが自分の父の家にいるのは当たり前だということを、知らなかったのですか」。当然、マリア様は、戸惑いました。「これらのことをすべて心に納めていた」。福音が、マリア様の心境をそのように描いています。時が来ると、必ず神からの回答が表れる、マリア様はそう信頼していました。

マリア様の最後の生前の姿は、使徒言行録にあります。それは、聖霊降臨の日の前の夜、マリア様は他の婦人たちと祈っていました。聖母は、使徒たちに大事にされたことやイエスが天に上げられたことを「力ある方が、わたしたちに偉大なことをなさったから」という賛美の祈りをその場でも祈っていたに違いありません。

聖霊降臨以降、聖書には聖母の姿がありません。カトリック教会はマリア様の旅の続きをこのように教えます。

「聖母は地上での生涯を終えてから、肉体的、霊魂ともども/天の栄光に引き上げられ/主から、すべてのものの元后として高められた」。

第一朗読にある一人の女性と同じように、マリア様は完全に神の光に包まれて、完全に神のうちに生き、神の光に包まれている私たちの母です。

この教義に基づく今日の典礼を祝いながら、聖母の背中を見て、私たちの信仰の歩みを考えましょう。

長い距離を歩いたり、重い荷物を運んだり、心の傷を負ったりした聖母は、日常生活を通して神のお言葉に自分を委ねました。息子の死刑執行を目の当たりにした母は、どんなに苦しんでいたのか、私た

ちは想像しつくすことができません。聖母は傷を負いながら、初代教会の一員として信仰生活を貫きました。

聖母と同じように、私たちも社会と教会共同体の中で、言葉、行い、表情、すなわち体をとおして、人と関わっています。「希望」「信仰」と「愛」といった言葉を口にしなくても、それらは、私たちの体全体から現れています。私たちの表情が誰かに希望を与えるのです。私たちの顔つきが誰かに計り知れない力を運んでくれるのです。人の話に耳を傾け、その話に興味を示す表情は、人の自信や発言力の発達の助けになります。逆に、私の鋭い一言が人を傷つけるときもあります。

この私たちの体がさまざまな痛みを受け止めています。肉体的な病による痛み、精神的な病による痛み。私たちの日常生活で、魂を壊す刺激がいろいろあります。憤り、怒り、わめき、そしりなどです。人が与えた肉体と精神の傷は、私たちを復讐の念に燃え立たせることがあります。

私たちは、受けた痛みと燃え立たされた感情をイエス様と共に受け止めて、神の恵みによって癒されるという恵みの訪れを希望しています。

この希望は日常生活を通して生きているのです。つまり、この希望は日々の小さな出来事の積み重ねを通して輝き、この希望をマリア様と心を合わせて大切にしています。

しばらくの間、ある同僚と話ができない時がありました。年月が経って、私たちの間にお互いの理解や仲直りが訪れた、といった恵みをいただきました。感謝しています。

私たちは、イエス様の十字架の贖いと、マリア様の執り成しを信じて、イエスが示してくださった道を歩もうとしています。私たちの今日に至るまでの旅路を振り返って見ると、いろいろの途上において神の偉大な力が現れたことが分かります。その力は誰かの助け、言葉、微笑みを通して現れました。私たちの歩む道は、神への信頼と日頃の心配や戸惑いのある谷です。旅をしながら、平和の道も作っていきます。人生の旅を続ける心の糧として、先週のパウロの言葉を心に刻みましょう。

「互いに親切にし、憐れみの心で接し、神がキリストによってあなたがたを赦してくださったように、赦し合いなさい。あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。キリストがわたしたちを愛して、ご自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。」エフェソ5・1-2

シノドスを生きる、ともに歩む教会になるために

西村桃子さんを迎えての仙台教区研修会

■日時：2024年7月14日(日) ■会場：元寺小路教会大聖堂 ほか

西村桃子さんの「シノドスを生きる、ともに歩む教会になるために」の講演会が、年間第15主日のガクタン エドガル司教のミサ後、引き続き、満員の参加者を前に行われた。

はじめに、「シノドスのための祈り一聖霊よ、わたしたちはあなたの前に立っています」を唱え、始まった。自己紹介から、最後まで、シノドスの歩みを、ご自分の体験なされた歩みに沿って、パワーポイントを使い、分かりやすく説明して下さった。



まず、自己紹介。「セルヴィ・エヴァンジェリー」(神のいつくしみの福音に仕える者) 宣教会の会員であること。第二バチカン公会議後に誕生した、男女の信徒と奉獻生活者が会員であるが、アジア

には、日本とフィリピンと韓国に共同体がある。日本は5人のメンバーで、日本人は私一人であるが、横浜教区で、青年司牧活動に従事している。教会公文書や、会議の翻訳・通訳なども担当している。

シノドスとの関係は、2023年2月、アジア大陸別のシノドスの委員の一人として出席し、実行委員、文書作成チームのメンバーとしてかかわった。第16回シノドス通常総会で、議長であるフランシスコ教皇の代理として、会議の議事運営に携わった。2024年10月に開催されるシノドス総会第2会期においても、議長代理を務める。日本とアジア司教協議会連盟(FABC)のシノドス特別チームのメンバーでもある。

自己紹介に続いて、「ローマ・シノドスとは」、というタイトルで、1965年、パウロ6世教皇によって設置されたシノドスの歴史を紹介した。今回の第16回シノドスは、期間の長さにおいても、参加者の数においても、参加者の多様性においても、司祭、信徒、男性、女性の参加が求められ、発言権もあった。これまでのシノドスとは全くと言っていいほど違っていた。期間は3年間であり、参加者は枢機卿、司教たちだけでなく、司祭、信徒、奉獻生活者などがおり、そのうち女性は54人であった。この参加者は、各大陸から、20人の候補者を出し、そのうち半分以上は女性を入れるようにという勧めがあったということであった。



第15回までのシノドスは「世界代表司教会議」といわれていたが、今回からは、「シノドス」という言葉が意味している「ともに歩む」ということで行われた。この点について、カトリック信者の全ての人、さらに、教会について知らない人にも、なるべく多くの人の意見を聞きたいということを教皇は望まれた。そのため、まず、各国の意見を聞きたい、ということで、国別の意見が集められた。日本では、コロナ禍の最中であったが、教区別に意見が集められ、それが国としてまとめられ、次に、大陸ステージごとにさらに「霊における会話」が進められ、まとめが出された。各大陸別の「まとめ」の中で、アジア大陸が出した作業文書『あなたの天幕に場所を広く取りなさい』は、第1会期では大変ほめられた。

第1会期は、2023年10月に開催された。参加者365人が、「どうすれば、わたしたちは、より『ともに歩む(シノドス的)』教会になることができるでしょうか?」というテーマについて話し合ったが、その会が始まる前に、参加者全員、3日間の黙想会を行うことで始められた。

そのシノドスの進め方は、テーマ「ともに歩む教会のため一交わり、参加、そして宣教」が、討議要綱の内容に沿って「霊における会話」の方法で進められた。

ともに歩むシノドス的教会になるための優先事項は、「交わり、宣教、参加」と決まり、「交わり」、「宣教」、「参加」というそれぞれ5つのテーマ別のグループで、小グループに分かれて分かち合いをした。全員が同じ平面のテーブルに座り、家族的な雰囲気であった。

「霊における会話」の説明で、たびたび強調され説明されたのは、「主役は神、聖霊」「大切なのは、話し手の話を聴くこと」であった。

午後からは、各地区から2人ずつの代表者が集まり、グループに別れて「霊における会話」を実践した。参加者が実際に体験したことを各地区に持ち帰り、ともに歩む(シノドス的)教会となるように分かち合い、終了した。

元寺小路教会 献堂記念ミサ



献堂記念ミサ 年間第13主日

日本国内の最後の内戦といわれた西南の役があり、その一方で蛮書調所があり、キリシタン書や西洋からの書物が入るのを取り締まった洋書調所となった所が、次第に発展し、東京大学と呼ばれるようになったのも1877(明治10)年。この年に、実は元寺小路に家屋付の土地が購入され、「元寺小路教会」として誕生したのです。創立から今年で147年。色々な歴史の波にもまれながらも、今日、多様性ある教会として、多くの国の人々が参加し、この聖ペトロ・聖パウロを保護者と仰ぐ献堂記念のミサを祝いました。

この日のミサは、主司式は、ガクタン エドガル司教、イグナシオ・マルティネス神父、それに1年ぶりになつかしい高木健太郎神父の共同司式でささげられました。

日頃、このミサに参加し、主の恵みを豊かに頂いていることを感謝しながら、ガクタン司教は、次のように話されました。

主の家に集い、ミサを通して、さまざまな恵みを、皆様と共に感謝したいと思います。特に、今日は高木健太郎神父が、留学先のフィリピンから無事に帰ってきたことを感謝したいと思います。私は、1週間前、フィリピンに行ったのですが、高木神父の乗った飛行機と空ですれ違ったのです。

後ほど、高木神父へ任命書をお渡しします。高木神父様には、第4地区のカテドラルブロックの協力司祭として、宣教司牧で活躍していただけることを期待しております。

最初にこのうれしいお知らせが伝えられ、高木神父のにこやかな笑顔に、参加者一同思わず大きな拍手でその喜びを表しました。

私は、自分の所属している淳心会という修道会の会員たちに、黙想指導をするために、フィリピンに行っていました。いくつかの黙想への導入を話したのですが、その中の一つの話は、昇天についての話でした。典礼季節から外れている話ですが、主イエス・キリストのご昇天は、前任者から後任者へのバトンタッチのように連想しています。

「蝶々夫人」という有名なオペラがありますが、これを作曲したジャコモ・プッチーニは、次々とオペラを作曲し、大変有名な人でしたが、「トゥランドット」というオペラを作曲している時に、病気のために1924年に急逝しました。その後、その未完の曲を友人が作曲して完成させました。できたオペラの演奏会でこれも著名なトスカニーニが指揮をしました。初演の初日当夜、トスカニーニがあるところまでくると、演奏をストップさせて聴衆に「マエストロはここまでで筆を絶ちました」と述べて舞台を去り、慌ただしく幕が下ろされました。2夜目になって初めてアルファードという作曲家による補作部分が演奏されました。この有名な作品の完成への作業は、巨匠と弟子とのバトンタッチのようでした。リレー競技のバトンタッチがあります。私たちは、イエス・キリストの弟子としてリレーのバトンが渡されたものです。

昇天の場面では、主は十一人の弟子に「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい」という使命を告げました。その派遣の言葉は、教会に渡されたバトンです。私たちは「天に上げられた」という言葉を打ち上げのようなものとして想像してしまいます。「天」という聖書の言葉は、神の臨在を表す言葉の一つですが、イエスは、私たちと共に継続的におられます。そのために私たちは「神の国が来ている」、という良い知らせを伝え続けています。

さて、今日の福音箇所ではヤイロが主イエスに娘のいやしを願い、その願いに答えてイエスがいく途中、12年間病気を患っている女性の話がはさまれています。この2つの奇跡の話は、一緒に読まなければなりません。

会堂長のヤイロは、イエスの所に来てひれ伏して、「私の娘が死にそうです。家に来て、いやしてください」と願いました。イエスは「行きましょう」とおっしゃり、ヤイロの家に行く途中のことです。12年間出血病が治らない女性が、この方だったら癒していただけるという思いで来たのです。当時、出血病の治療方法は11あったと言われていました。この女性は、その11の全ての治療をしてもらいました。しかし、ますます悪くなるばかりだったのです。この女性は既成概念を捨て、イエスのところに来たのです。

出血病は当時汚れた病でした。ですから、人前に出ることもできなかったのですが、この人はイエスに会いたい一心で、こっそり人込みの中に入り込み、イエスのところに来たのです。しかし、イエスは「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」とおっしゃったのです。

12年間患っていた人は、あらゆる方法を試しましたが、ダメでした。汚れた者と言われ、軽蔑されている私の悲しみから、私を解放してください」という思いで、イエスの服の裾に触れて、いやされました。長い間、疎外感を抱いていたこの女性は、癒し以上、つまり神の家族に迎え入れられた、そう実感したに違いありません。

ヤイロの娘のいやしの話ですが、イエスはヤイロ家に着く前にしもべがやってきて「もう、先生をおわずらわせる必要がありません」と言っています。しかし、イエスは「娘は死んだのではない。ただ、信じなさい」と言いました。泣いていた人々に「泣くのはやめなさい。娘は眠っているだけだ」と。あのイエスのヤイロへの言葉は「信頼を持ち続けなさい」と聞こえています。「恐れるな、この聖書の言葉も、神がその場におられることを表す言葉です。ヤイロの娘は12歳でした。12歳ということは、当時のイエスの時代には、もうお嫁入りできる年ということです。お告げを受けた聖母マリアもこのくらいの年齢だったと言われています。「恐れることはない」、天使が聖母に同じ言葉を言いました。

「恐れることはない。ただ信じなさい」、これは私たちが持ち続けるバトンです。

私たちにも、いろいろな苦しみ、悲しみ、治してもらいたいところがあります。作曲家で耳が聞こえなくなったベートーベンは、それでも、「第九」として親しまれている交響曲第9番を残してくださいました。ヘレン・ケラーは、目が見えませんでした。しかし、何冊もの本を残しました。お二人自身とお二人を支えてくれた周りの人たちに、「恐れることは

ない。ただ信じなさい」、という信仰があった、私はいつもそう思っています。

私の願いは神の耳に届いていない、と思う時があります。しかし、私たちの知らない所で神は働いてくださっているのです。私たちと共に神は存在しておられるからです。イエスは、今日の福音を通して、私たちに「ちょっとだけ辛抱してください」、とおっしゃっているようです。ヤイロに、「今あなたの娘は起き上がっている。信仰を持ち続けなさい」とおっしゃったのと同じように、このことを、私たちに今言おうとなさっているのではないのでしょうか。

ミサは、ベトナム語、英語、日本語、スペイン語、韓国語の歌が歌われ、共同祈願にも、その他多くの国の人々が祈りをささげました。



ミサの最後に高木神父が、次のように挨拶した。「昨日、仙台に到着しました。送り出してくださいました。司教様、神父様方、信徒の皆様、本当にありがとうございました。たくさんの体験をさせていただくことができました。これから、ミサやお祈り、信心業などいろいろと、分かち合いをしたり、英語のことでもお手伝いをしたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。」

献堂記念お祝い会

ミサの後は、聖堂前の広場に集まって楽しいひとときを過ごしました。ベトナムコミュニティのダンスや聖歌隊の歌、韓国コミュニティのウクレレ演奏など、最後は大勢が輪になってフォークダンス。みんなが一つになったお祝い会になりました。



震災から13年。今、感じていること 〈カリタス大船渡ベース〉



東日本大震災から13年余りが経過しました。その間に、とても多くの方々からのさまざまな支援とお祈りをいただき、それに支えられて被災地は復旧復興を遂げてきました。大船渡市でも計画された復旧工事は100%完了し、安全で、安心して暮らせる町ができました。しかし、復旧工事が完了するとともに、その工事に携わってくださった方々は徐々に撤退し、町から人がいなくなり、震災以前より急速に過疎化が進む町になりつつあります。人口減少、少子高齢化という日本のどこの町もが抱える問題が、私たちの町でも浮き彫りになってきています。教会内でも同様に、信者の高齢化が進み、また子どもたちもさまざまな理由で教会を離れていて、ミサに参加する人が減少してきており、とても寂しいことです。

そのような中で、大阪高松大司教区の酒井俊弘司教様と信徒の方々御一行が、5月16日～19日の4日間、「仙台教区教会巡りの旅」を催行し、青森県の本町教会、弘前教会、十和田教会、八戸塩町教会、岩手県の久慈教会、宮古教会、遠野教会を巡り、そしてその最終日に、カリタス大船渡ベースと大船渡教会を訪問してくださいました。ベースでの震災学習の後、津波到達地点などを見学しながら教会へ移動して、ごミサと交流の時間を過ごされ、午後は陸前高田市へ移動して、東日本大震災津波伝承館と津波復興記念公園内を見学されました。『海を望む場』で祈りをささげ、公園内を散策。周りの景色を眺めながら私の拙いガイドに耳を傾けてくださり、「これまで



も話では聞いていたけれど、やはり実際に現地に来てみると感じるものがある」との声が聞かれました。自分たちに何ができるだろうかと考え旅を続けてこられたとのこと。長旅の疲れを感じさせないほど積極的に行動されている理由が、少しでも分かったような気がしました。直接、被災した方々と触れ合う時間は少なかったけれど、いつまでも東北の被災地のことを忘れず、被災地で暮らし続ける方々のために心を寄せてくださる方々がいるということ、私たちの日々の活動の中で伝えていきたいと思っています。

震災をきっかけに始まった大阪教会管区の皆さまと東北の教会との交流。神様のご計画はどのようなものであるのかは計り知れないけれど、この交流で結ばれた「絆」こそ「新しい創造」の一つではないのかと感じています。

カリタス大船渡ベース
ベース長 菅原 圭一

仙台教区のうごき

司祭評議会 & 宣教司牧評議会役員会の3か月の歩み

2024年度から、仙台司教区で宣教・司牧活動をしているのは、司祭たちだけではない、信徒宣教者と呼ばれる人々もいるではないかということで、毎月1度、仙台司教区司祭全員が集まり、月例会が開かれていましたが、今年度に入って、司祭だけが集まる集会を「司祭団例会」、信徒宣教者も含めての集会は「司牧奉仕者の集い」と分けることになり、その第1回目は5月27日に行われた「司牧奉仕者の集い」で、福島被災地訪問が行われました。お互いが知り合う良い機会だったと、司祭と信徒宣教者の双方から、感想が届いています。

信徒宣教者とはだれでしょうか——信徒であり、教会が認めている宣教者を呼ぶ名称です。現在仙台司教区には、クレア・サンチェスさん(仙台司教区が信徒宣教者として任命しています)とジュリ・フェクトさん(ケベック外国宣教会の信徒宣教者)の2人の女性が信徒司牧者として奉仕しています。

司祭評議会が主に議論してきたことは、宣教司牧の意味から始まり、信仰の基盤づくり、信仰の伝達、小教区の大切な役割は、信仰共同体作りだということでした。信仰の基盤をかためながら、社会に福音を述べ伝えることが必要、というこの役割を全員で確認しました。

さらに、各地区、各共同体で、どんな試みをしているかということについては、分かち合い、入門講座、聖書講座、黙想会なども含めた信仰養成などをそれぞれの小教区で実践なさっていらっしゃる。これを通して、小教区の宣教の役割——福音を伝えること、典礼を通して身近なことを伝えるようにしている、等のことが上がっていました。

もう一つの大きなテーマは、仙台教区の現実を振り返ることとして、52小教区を見ました。これは、司教の年頭書簡にあった仙台の畑を現実に考えることができた——財産としての土地、建物はどうなっているかを資料と共に確認できたという多くの意見から話し合われたものです。

もう一つの大きなテーマは人間を見ることでした。信徒数、受洗者数、初聖体者数。それだけでなく、信者の高齢化。また、教会が置かれている地方の「現状」の中にある教会のそれぞれの課題も見えてきました。

もう一つの大きなテーマはシノドスでした。

普遍教会のシノドスの歩みに共に少しずつ沿って

行こうとしています。しかし、初めはあせらずに、仙台教区なりの歩みをしようと考えました。

昨年11月に初めて司祭の集いの中で研修会が「司祭のシノドス」と言う形で行われました。ちょうど、シノドスの議長団メンバーの一人であった西村桃子さんを講師にお招きすることができ、具体的に、「霊における会話の方法」を教えられ、よい体験をすることができました。

その後、司祭団の中にシノドス・チームが設置されました。チームメンバーに任命されたのは、幸田和生司教、李錫神父、イグナシオ・マルティネス神父の3人です。

その後の「司祭団例会」では、分かち合いを大切にしようという動きが生まれ、祈りも同時に大切にされるようになりました。

9月23日(月・振替休日)の宣教司牧評議会定例会の招きの手紙が全小教区に送られました。

この準備を支えるために、7月14日(日)、元寺小路教会ミサ後は参加を希望しているミサ参加者に1時間のシノドスについての基礎講演が行われ、その日の午後からは、各ブロック代表者2名ずつが小グループに分かれ、出された2つの課題について「霊における会話」で話し合いました。

これは、DVDが制作され、各地区に送られたので、9月23日当日までには、参加者が小教区で、地区で、ブロックで、参加できなかった多くの人に知らせていることと期待しています。

8月に行われた司祭評議会において、メンバーは実際に司教の指導のもとで、「霊における会話」を「福音宣教に奉仕する小教区へ」というテーマで行いました。会議でありながら、霊における会話で、分かち合いをしたのです。

もう1つの仙台教区全体に影響する具体的なことは、2025年の聖年のことです。教皇フランシスコが出された聖年公布の大勅書「希望は欺かない」で各地に巡礼地を設置するとともに、巡礼の心を育てるように努めることが勧められています。

司祭評議会のメンバーが、毎回、真剣に話し合い、よりよい方向へ聖霊の導きに従い、皆様と共に歩んで行けたらと望んでいます。どうぞ、皆様もお祈りで支えてください。

教区事務局長 イグナシオ・マルティネス神父

各地区からのお便り

第1地区より

〈三ハブロック／八戸塩町教会〉 三ハブロックインターナショナルデイ

2024年6月2日に、三ハブロックの『インターナショナルデイ合同ミサ並びに交流会』が、日本、フィリピン、ベトナム、フランス、アメリカ、インドネシアの方々約250人が参加し八戸塩町教会で開催された。



司式は、秋田県大館教会のグエン・タン・ヒ神父様と八戸塩町教会のパトリック・カストロベルデ神父様ならびにアンリ・バディバング神父様で三ハブロック内各教会とブロック外の浪打、大湊教会などから信徒が参加した。

ミサは基本的には日本語で行われ、朗読、答唱詩編は各国語で、奉納も各国の方々で行った。説教を日本語とベトナム語と英語で行い、共同祈願も、5カ国語で行った。閉祭の後に祭壇付近で記念の集合写真の撮影をした。



ミサ後、イメルダ幼稚園園庭で交流会を開き、野点のお茶を用意し、各コミュニティ・教会の紹介、各国家庭料理の提供等を行った。司会も、日本語、英語、タガログ語、ベトナム語で行った。交流会会場はフィリピンやベトナムの若い人たちでとても盛り上がり、大変な賑わいとなった。聖霊の導きで多くの信徒が集まっていたと、素晴らしい交流会になったことを報告します。神に感謝。

牧山 智廣 (八戸塩町教会)

〈三ハブロック／八戸塩町教会〉 2024 三ハブロックサマーキャンプ



台風5号マリアが接近する8月12日、21人の子どもたちの参加で、「あなたもわたしも神の子ども」をテーマに10時から、「三ハブロックサマーキャンプ」を第1地区の4名の神父様と共に八戸塩町教会で開催した。内容は、ワクチン双六・クイズ・昼食・『平和旬間』なので広島平和公園「原爆の子の像」の禎子さんの話、アニメ「アマイとサダコの祈り」で勉強し、折り鶴を折り11月に広島平和公園の折り鶴のコーナーに奉納する・クッキー作り・スイカ割り・おやつ・ジャスティン神父様の前任地のモンゴル国のお話・夕食・集合写真撮影・お御堂でロウソクの炎



をキャンプファイヤーに見立て、フォークダンス。参加した子どもたちは、皆元気に楽しんでくれて、けが人、病人も出ず無事に20時に終了した。台風も八戸まで影響が出ない程度で済んだこと、神のご加護に感謝します。運営に協力してくださった方々に御礼申し上げます。

牧山 智廣 (八戸塩町教会)

第4地区より

〈カテドラルブロック／元寺小路教会〉 ～イエスさまのところに集まろう～ 侍者のつどい

7月26日(金)小学生から高校生まで9人が元寺小路教会に集まり、侍者のつどいが行われました。自己紹介のゲームから始まって、イグナシオ神父様と一緒に香部屋で、ミサの道具を見て鐘を鳴らしてみたり、アルバを着てみたりなど、子どもたちは興味深々です。この後大聖堂のパイプオルガンにも触ることができました。昼食のあとは、全員で侍者をしながら、感謝のミサをささげました。



最後にスイカ割りで大いに盛り上がり終了しました。今回の侍者のつどいを通して、子どもたちが積極的にミサに参加してくれることを願いました。

関 毅（元寺小路教会）

～イエスさまとともにあるきましょう～ 教会学校サマーデイキャンプ

8月3日、小中高生25人が集まりデイキャンプを行いました。東仙台教会、司教館、大阪聖ヨゼフ宣教修道女会、オタワ愛徳修道女会を訪れ、祈りのスタンプラリーをしました。参加者の半分は、教会が初めての子や、親族が信者でも洗礼は受けていないという子たちでした。信者でも初顔合わせがほとんどの中、一緒に歩き祈るうちに、次第に打ち解けて賑やかな集団となり、最後のスイカ割りは大盛り上がりでした。



ミサでは、スタンプラリーカードを奉納し、一人ひとり司教様に受け取っていただきました。そして子どもたちの奉仕と参加者全員によって素晴らしいミサとなりました。今回、子ども時代にキャンプに



来ていた青年たちが、リーダーとして頑張ってくれたことは、大きな恵みでした。司教様、エメ神父様、イグナシオ神父様、高木神父様、シスター方、信徒の皆さんが子どもたちを温かく迎えてくださり、皆さんを通してイエス様と出会う1日になったことに感謝しています。

教会学校リーダー会

佐々木 いつみ（八木山教会）

第5地区より

〈中通り北ブロック／松木町教会・野田町教会〉 毎年恒例「夏の集い」、開催！

夏休みに入った最初の日曜日(7月28日)のミサが終わった後、松木町教会では、毎年恒例の「夏の集い」が今年も行われました。今回はお兄さんお姉さんたち(だいぶ年上ですが)が中心となって企画し、子どもたちも7人が参加してくれました。コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会のSr. 江川の先導で全員で祈った後は、さまざまなゲーム、綱引きやジェンガ、エルサレム旅行、ビンゴゲームをして楽しく遊



んだり、七夕の短冊に願いごとを書いて飾ったり…。この日はミサが終わった聖堂でマリールイズさんの講演もあり、聞き終わった皆さんも途中から合流して、40人以上でにぎやかに集い、昼食のカレーライスもみんな食べるからか一段と美味しく、子どもたちと共にたくさんの笑顔があふれていた今年の夏の集いでした。

佐久間 アリス(松木町教会)

渡邊 祐子(野田町教会)

〈中通り北ブロック／松木町教会・野田町教会〉 ルワンダの悲劇から30年

ー感謝を込めてー

夏の集いと同じ日、松木町教会ではもうひとつのイベント、30年前のルワンダの悲劇を体験したマリールイズさんの講演会も開催されました。彼女は、悲劇の起こる1年前に福島県の県費留学生として来日し、洋裁の勉強をしていました。ルワンダに帰国後すぐに内乱がおき、幼い3人の子どもを連れて、命からがらザイルの難民収容所に逃げました。

皆、心配していると思い、平仮名で「たすけてください」と書いたFAXを、日本のホストファミリーに送りました。それを見た福島の日本語教室や教会関係の皆さんが、国や行政を動かして、桜の聖母短期大学の留学生ビザで、家族と共に来県することができました。彼女は習った「ひらがな」が、自分の命を救ってくれた。また、無知が悲劇を生んだと「ルワンダの教育を考える会」を設立して、内乱で親を失った子どもたちのための学校を、日本の人々と協



力しながら作り上げ、現在も、270人の子どもたちが、その学校で学んでいます。

今、彼女はミサにあずかりながら、人を通して示された神様の愛に感謝をし、母国と日本の平和が続くようにと、祈り続けています。

駒田 瑞穂(松木町教会)

司 祭 紹 介



シャール・エメ・ボルデュック(ケベック外国宣教会)

- | | |
|------------|--------------------------------------|
| ○生年月日 | ○宣教・司牧 |
| 1942年 | 1970年8月15日 初来日 |
| ○出身国 | 1972年～ 青森県八戸工業高等専門学校で英語教師 |
| カナダ | 1974年～ 社会福祉施設 大清水学園 勤務 |
| ○司祭叙階 | 1980年～ 同園長 |
| 1970年5月24日 | 1990年～ カナダに戻る ケベック外国宣教会の副総長として世界中を訪問 |
| | 1998年～ 再来日 元寺小路教会をはじめ仙台教区で宣教・司牧 |
| | 2024年 引退 |

シャール・エメ・ボルデュック神父が引退し、祖国カナダに帰国するというニュースが流れると、これまで、エメ神父が司牧していた各地の教会から、招きの声がかかり、ミサと思い出のお話をなさっていると聞いています。そこで、編集部としては、ぜひ、54年にわたる日本での宣教活動から、ぜひ、今の日本の教会、特に仙台司教区の皆さんに、これだけは伝えたい、これだけは、残しておきたいというお言葉をお伝えしたいと思いました。

聞き手：仙台教区広報委員 長谷川 昌子

今、仙台に大切なことは

私が日本に来たのは1970年8月15日、聖フランシスコ・ザビエルが日本に来た日であり、聖母マリアの被昇天の祭日でした。この年は、大阪万博があり、安保、三島事件があった年です。日本に来て私はまず、当時フランシスコ会が六本木の本部にあった日本語学校で、2年間日本語の勉強をしました。

その頃、仙台教区には、教区司祭も宣教師もたくさんいました。司祭の皆さんが1つの教会の主任神

父をしていた時代です。ですから、私は、もう主任司祭の席はないから、自分で、どこかで仕事を探しなさいという条件で、仙台に来ました。

私が来た最初は、日本人の司祭は、今の倍はいらっしゃったと思います。当時から今までで、22,3人の神父様は亡くなられたのではないのでしょうか。

でも、「元気な人、働く人も少なくなった」と絶望的になることはありません。



協力することです

今の課題は、教会の看板を下ろすことではありません。教会を閉めることはよくありません。教会を閉めるのではなく、それぞれの教会が協力し合って支え合うことです。

祈りながら、話し合い、協力していけば、何とかなると思うのです。話し合いといっても、イデオロギーの論争では分裂します。今、ここにいる私たちが、どういう教会にしていきたいのか、と話し合うことです。協力し合うことです。

仙台の教会の将来は暗くないと思います。もちろん戦後の教会の雰囲気と、今の教会の雰囲気は違います。戦後はたくさんの教会を造りました。今は、別の何かを工夫しなければなりません。

ここで、1つの例を申し上げたいと思います。例えば、福島市は人口29万人。その福島市に、野田町教会と松木町教会の2つの教会がありますが、車で10分の距離です。例えば、この2つの教会に、一人の司祭しかいないとしましょう。私は、福島に派遣されてから、ずっと、9時に松木町でミサ、11時に野田町でミサ、また、その逆の時間でのミサということも考えられます。日曜学校も2つの教会が協力して、1つのクリスマス会をしました。

「霊における会話」

今、シノドスということで、普遍教会も、日本の教会も、仙台司教区も、「ともに歩いて」います。ここで、行われる一つの方法は「霊における会話」です。もう読者の皆さんもご存じのように、3つのステップを参加者の話を聞き、祈り、聖霊が何を私たちに望んでおられるのかを祈り、聞き、それを実現するように努力していく方法です。

その「霊における会話」を、1月～3月まで、松木町教会で行いました。そこで、何をしたかという会長選挙をしたのです。

年度明け早々会長の交代なのです。その前に教会の信徒全員で選考委員を男女4人ずつ選びました。

選考委員の8人全員に教会名簿と規則を渡しました。第1ステップとして、共同体の現状について、祈ってから書いていただきました。

第2ステップとして、このような現状を抱えている共同体にどのようなリーダーシップが必要だと思いますか。祈って書いていただきました。

第3ステップは、祈って、名前を出す。(司祭に渡す) 司祭は8人がこの人が委員長にふさわしい、と思った人のその名前の挙がった人、一人一人に会いました。

その人が断ったとしても、司祭はその理由は言いません。

ここからみんなが学んだことは、社会の組織的なことは、勉強にならない、ということです。教会は根回ししたり、損得を考える社会とは違うのだということです。

こうして、教会委員長が決まりました。教会の皆さんも納得し、満足していただきました。

聖霊が送ってくださった司教様方

私は、仙台教区に来て、5人の司教様の下で奉仕しました。小林有方司教様、佐藤千敬司教様、溝部脩司教様、平賀徹夫司教様、ガクタン エドガル司教様です。人間ですから、どなたも長所も欠点もありです。当たり前です。でも、言えることは、ちょうどいい時に、神が送ってくださった司教様だということです。いつも、その時の聖霊の息吹を感じます。このことを皆様もぜひ、覚えておいてください。神が、聖霊が、送ってくださった方です。

「カナダに帰ってからも、
私は仙台教区のために祈っています。
忘れませんよ。」



教区の諸活動

核廃絶と平和を求めるミサ

第31回「核廃絶と平和を求めるミサ」が、カトリック正義と平和仙台協議会主催、カトリック仙台司教区後援で、7月16日(火)17:30ロザリオの祈り、18:00からミサが元寺小路教会でささげられた。

ロザリオは苦しみの神秘を日本語、韓国語、英語、ベトナム語で、一連ずつ唱えた。続いて行われたミサの主司式は正義と平和仙台協議会担当司祭であるイグナシオ・マルティネス神父、共同司式は、兪鍾弼神父と高木健太郎神父であった。



イグナシオ神父が、「今こそ平和が必要です。私たちはキリスト者として、キリストから来る真の平和を、心を一つにして祈り求めましょう」と呼びかけ、ミサが始まった。

説教の中で次のように話された。

7月16日は、人類にとって、特別な意味がある。ちょうど78年前・1945年のこの日、世界で初めてアメリカのニューメキシコ州で人類初の核実験が行われた。この日から人類の歴史は変わった。

当時、科学の真実を追い求めるには、宗教が妨げ

になると考えられていた。だから、神を否定し、人間を中心にしなければならないと考えた。人間を求める真実、それを核開発、核実験を通して求めた。

一番お金になる商売は戦争である、一番技術と知恵を使うのも戦争であるということ学ぶこと。しかし、神のお望みはそうではない。

新約聖書では、このマタイの真福八端に、私たちへの根本的なメッセージが与えられている。平和を実現する人たちは幸い、その人たちは神の子と呼ばれる。ただ戦争をしないことだけではなく、神の子と呼ばれるまでになるように平和を実現していくことなのである。義のために、たとえば、飢え渴くかもしれない。平和を実現する人が、心の清い人、柔和な人である。これが、キリストが示してくださっている、私たちへの考えである。

ミサの終わりに、正平協担当者として、初めてこのミサをささげることができたことをうれしく思っている。私たちの教会共同体として、いろいろな言語でロザリオと共同祈願をすることができた。私たちは、いろいろな言語や文化を大切にし、一緒になろうとしている。私たちの教会共同体から始める平和を大切にしなければならないと、仙台正平協は考えている。

ぜひ、これから平和を広げていくことができますように！多様性を大切に、進んで行くことができますように！ Sr. 長谷川 昌子(教区広報委員)

カトリック正義と平和仙台協議会主催の平和旬間講演会 「無関心は命を奪います」

8月4日、元寺小路教会で、カトリック正義と平和仙台協議会主催の平和旬間講演会がイグナシオ・マルティネス神父を迎え、9時半の主日のミサ後から12時まで開催された。参加者は約100人で、いつもの集会より参加者が多く、喜ばれた。

テーマは「いのちに対する暴力を止めることができるのは、わたしたち自身です——『無関心はいのちを奪います』」

「無関心はいのちを奪います」という言葉から、マザーテレサの「愛の反対は無関心です」という言葉を思い出しましたが、これは平和についても言えることです。愛の反対は憎しみのように思いますが、憎しみはわたしたちの目に見えます。でも、無関心は目に見えないのです。

ミサの回心の祈りで私たちは、「思い、ことば、行い、怒りによって、たびたび罪を犯しました」と唱えます。悪いことをするだけでなく、いいことをすべきなのに、しようしないことは、無関心にもなるし、愛の反対でもあるし、自分の世界だけを見ることにもなるのです。

まず、みことばから見ていきましょう。私たちの神は、無関心でいられない神です。

出エジプト記3：7 モーセの召命についてのべているところです。ご自分の民を解放するために、この言葉を言われます。

主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。」

神の痛みは、人間の痛みです。今、世界中で苦しんでいる人、痛みを感じている人の声を神は聞いてくださる。神は私たちの苦しみに無関心でおられることはないのです。



次はルカ福音書15:20 放蕩息子の有名なたとえ話です。

下の息子はお父さんから貰った財産を無駄使いし、すべてを使い果たし、自分が惨めな状態になったことで、我に返り、お父さんの家に帰ろうとします。

今日は、この息子のことより、父のことに注目したいと思います。父の方が大切です。父は、息子がまだ遠く離れていたのに、走り寄って首を抱いて、接吻しました。父が、息子に何をしたかが、具体的に書かれています。

父はまだ遠く離れているのに、息子を見つけました。いつも、神は父親として、私たちが何をしようとして見つけようとしておられるのです。探し求める父です。どんなに遠くいても、見つける父。

見つけたら、憐れに思う。心の底からあわれに思ったのです。

「走り寄って」と書かれています。息子の所に走り寄って、父のいる所に、早く連れて行きたいのです。「首を抱き接吻して」。文化によって違いますが、このしぐさはラテン文化でよく見られる「ゆるしと和解」の表現です。今までしてきたことは、どうでもいい、大切なのは今あなたが帰ってきたことです、ということを表しています。

次は、マタイ9:36です。

これまで、出エジプト記とルカ福音書を見ました。これはどちらも、父なる神が、私たちのことを無関心ではいられないという姿でした。では、イエス・キリストの心はどうでしょうか。

「群衆が飼い主のいない羊のように疲れ果て、打ちひしがれているのを見て、深くあわれまれた」とあります。無関心ではない主イエス・キリストの表現です。群衆に同情を表しています。その群衆は「飼い主のいない羊のように」と表現されています。群衆の状況は普通の状況ではないのです。羊飼いが守って、支えてくれないと、生きていけない存在です。弱り果てているのです。今の私たちの状態も同じかもしれません。いつくしみ深い神は、恵みの主です。

菊地大司教の会長メッセージの中で、取り上げられているいくつかの点に触れてお話しいたします。

1. 79年前、広島に原爆が投下されました。そこに慰霊碑が建っています。そこには、「過ちは繰り返しませぬから」と彫られています。

私たちは、この誓いを守っているでしょうか。過ちとは、何でしょうか。戦争、争い、憎しみ——これが実現されていません。私たちは、平和旬間の今、これを意識する必要があります。79年前のことを繰り返さないように。

2. 終わりなき無防備な市民の犠牲。

戦争は対等な戦いです。しかし、現代は、強い国が弱い国を圧迫する。そうすると、力のない人々が犠牲にされるのです。終わりのない無防備な市民の犠牲が続いています。

3. 無関心のグローバル化

世界的な広がりです。一つの現実を挙げるなら、携帯です。このごろ、新聞を読む人は少なくなり、ある人々は、「ケータイでニュースを見るので紙媒体はいらない」と言います。現実にあることも、ケータイを通してニュースを見てみると、現実とは思えなくなるのです。テレビ、パソコン、画面の先に何かがあるか、見ない。自分と関係ないこと、他人ごとになってしまうのです。

4. 「希望の巡礼者」への招き

2025年は、聖年です。私たちのできることとして、これが挙げられています。聖年のテーマは「希望の巡礼者」です。教皇は聖年のために、大勅書を出されました。『希望は欺かない』という回勅です。私たちが、今、困難でも希望を失うことがないように、希望の巡礼者として、1年を過ごしていきましょう。

5. 平和を求める「シノドスの旅」

今回のシノドスは、今までと全然違うシノドスとなりました。今までと違う方法とテーマで行われています。今までは、遠いローマで、司教のみの集まりでした。その結果として、分厚い文書が出て、自分の現実と関係ないようなものになっていました。

今回は違う。そういうことにならないように、私たちの現実から始まりました。シノドスはすべてのキリスト者への呼びかけです。困難な中であっても、あなたは、今だれと共に歩んでいますか。良きサマリヤ人のたとえ話は、その人の隣人になったのはだれですか、とイエスが質問されました。私の隣人はだれでしょうか。私のほうから、進んで、隣人になろうとしていますか。私にできることは何でしょうか。だから、無関心ではいられないのです。

では、私たちが、無関心を乗り越えるために、どうすればいいでしょうか。

第1に現実を知ることです。

どうして今の世界は分断しているのでしょうか。

1. 宗教の違い、2. 民族や文化の違い、3. 政権への不満、4. 領土、資源の奪い合い、などは、争いの原因になりやすいものです。

この社会の中で、私たちキリスト者の役割は大切です。

世界の歴史の中で、一番グローバルなのはキリスト教です。国境なき共同体になれる可能性があるのは、キリスト者の共同体です。

各自が関心ある活動をすることによって、歩いて行けばよいでしょう。互いに多様性を認めながら。私たちは教会の大きな傘の中に入っています。

このグループは良くないと言うのではなく、協力し合って、知り合っていくのです。無関心にならずに、互いに歩いて行きましょう。無関心であってはなりません。

Sr. 長谷川 昌子(教区広報委員)

平和を求めるキリスト者合同祈禱集会

「平和を求めるキリスト者合同祈禱集会」が、8月11日(日)午後2時半から4時30分までの2時間、カトリック元寺小路教会でキリスト教各教派の人々が参加して、講演と礼拝を捧げた。

第1部は「平和を祈る七夕市民の会」の代表・油谷重雄さんの講演。



油谷重雄さん

油谷さんは、1975年、東京の戦争を学ぶ会の講師から、「8月6日は広島に原爆が投下された日、この日に七夕を飾って、

「核兵器廃絶を祈るべき日」とインスピレーションを受け、平和七夕の活動を始めた。以来今年まで49回目の七夕を終えたばかりである。多くの市民が色とりどりの折り紙で鶴を折り、

それをつないで、5本の吹き流しにして掲げている。使う鶴は、約20万羽分。カトリックの教会や、個人的でも、1年中、鶴を折って平和を祈っているお年寄りもいる。協力している学校もある。49年間の間、コロナ禍の時は、七夕祭そのものが祝われず、油谷さんはその作った平和七夕を生協やトヨタ自動車東日本(株)、学校などに分散し継続することができた。「ノーモア広島、ノーモア長崎」と短冊を付けた平和七夕であるが、今年は世相を反映してか、一般の七夕にも平和を求める文字が目についた。



田所義郎牧師

第2部は礼拝で、聖書朗読の後、尚絅学院大学の宗教主任の田所義郎牧師が説教し、派遣、祝福があり、散会した。

第3回 仙台教区在日ベトナム青年大会 2024

～希望を持って前に進もう～

8月17日(土)～18日(日)善き牧者の愛徳聖母修道会のさゆりこども園を会場に仙台教区に住むベトナムの青年たち約120人が集まった。

はじめに、手作りの大きな十字架行列を行い、開会のミサは、ガクタン エドガル司教様、グエン・カウ・トゥリ・ドミニク神父様、新潟教区のグエン・タン・ヒ神父様の共同司式で行われた。



2日間、テゼの祈りや要理の勉強のほか、ダンスやゲーム、レクリエーションで盛り上がり、絆を深めた。途中、イグナシオ・マルティネス神父様と高木健太郎神父様も参加していただいた。

仙台教区の中で、ベトナムの若者たちと共に支え合いながら信仰の道を歩める事を神様に感謝する、有意義な2日間となった。

関 毅(仙台教区広報委員)



司牧奉仕者、「宣教司牧における対人関係」の研修行方

第2回目の司牧奉仕者の集いが、8月26日(月)～27日までの1泊2日で仙台市の秋保のホテルを会場に行われた。テーマは「宣教司牧における対人関係の在り方と心の支援」で、講師は原口芳博先生。



内容は、①対人関係の築き方や維持の仕方とハラズメントを防止する

②は、「心の病」を持った当事者の方や家族の方に対する接し方を深める

③司祭(司牧者)の「心の健康」を維持し増進することを中心に具体性に富んだ豊かな分かち合いや講



話が行われ、参加者も「参考になった」と喜んでいました。

夕食は、エメ神父の送別会を兼ねた夕食会で、ガクタン司教から感謝の言葉が述べられた。以上の研修会については、詳細は、次号をお楽しみに。

■ 特別寄稿 ■

東北キリシタンのふるさと・会津〈その3〉

会津全域に広がる弾圧の中で 藩主保科正之の珍しい温情も

さて、南会津郡水無村(現南会津町)に横沢丹波とその家族が日々、深い信仰で支え合って生活していました。外国人宣教師も激しい弾圧を受けていた時期なので、丹波は自分の家を改造して二重壁を作り、その間の小さな部屋に外国人宣教師を匿っていましたが、それが発見されて、横沢丹波と周辺の関係する信徒などが、捕らえられて、その宣教師を含む全部で60名が会津若松に送られ、この薬師河原で処刑されました。1635年の12月17日から20日にかけてのことでした。17日には横沢丹波が、『南無阿弥陀仏』の6字の名号を付けた白衣を着せられて逆さはりつけにされました。20日には、外国人宣教師が逆さはりつけにされました。普通、日本人なら、この方法で2日で絶命するのに、この宣教師は12月26日の夕刻まで生きていて、それを見ていた人々に強い感動を与えました。この宣教師の衣服が、彼の入れられていた牢に、幕末まで保管されていたそうです。

現在、この河原に隣接する場所に、キリシタン塚と石の祭壇があります。1962年6月に会津若松教会によって建てられました。そして、今も毎年6月にカトリック会津若松教会によって殉教ミサが行われています。

さて、徳川家康の孫にあたる保科正之が会津藩主となった頃には、現在の大沼郡や南会津郡でキリシタンが盛んに捕らえられており、正之が会津の治世を始めた1643年には、南会津で踏み絵が始まりました。このような時期、信州高遠から最上を経て、

領主である保科正之とともに会津に来た家老の太田小太夫実次は熱心なキリシタンであり、俳人でもありました。初めは、正之は実次を若松の郊外の荒久田(現在も同名で市内北部に位置する)に土地を与えて居住させたのですが、キリシタン禁令がさらに厳しくなったため、もっと遠くの小布瀬ヶ原(現在の喜多方市北西部山都町の水舟寺)に移住させました。そして名前を谷野又右衛門と改めさせて、現在の山都町三津合に八町四方の土地を与え、農業に従事させて、一族40名とともに永住の地とさせたのでした。厳しいキリシタン禁制下での、保科正之の珍しく温和な対応だったのです。(家老という立場への温情だったのかもしれませんが…?)



天子神社、会津若松市谷野家跡

のあった若松の荒久田付近は、一時期、切支丹町と呼ばれていたことがあり、現在も残っている『天子神社』は、この時の谷野家の屋敷の中にあつたものです。

こうして17世紀の後半には、厳しい弾圧の中で隠れキリシタンとなり、明治初期まで、地下に隠れて息をひそめて生きて行くのです。この間の信仰を守り抜いた人々の『証』は、会津若松市、喜多方市、猪苗代町、河東町、柳津町、下郷町、南会津町など、会津地区の多くの市町村にわたって、点在しています。

佐藤 大(まさる)(郡山教会)

“一人ひとりのいのちが輝く大学”を目指して

私が大学に着任したのは2011年の東日本大震災直後でした。修道会の管区長に「あなたを日本で一番美しい場所に派遣します」と仙台への異動を命じられたのは震災前のことで、派遣の日には仙台空港も仙台駅も倒壊しており、山形から真っ白な雪山の中をバスで向かいました。道中、救助に駆けつけるボランティア団と目で挨拶を交わし合い、見知らぬ人々との見えない連帯を感じたものです。その頃はちょうど博士論文の仕上げの時期で、世界的ベストセラー『夜と霧』の著者、精神科医フランクルの「生きる意味」の思想が、被災地で絶望から立ち上がろうとする方々の生き様と重なりました。復興の道のりで、年ごとに回復していく人間の強さ、希望をもって生きることの素晴らしさに何度も勇気づけられてきました。



Sr. 加藤 美紀

学生たちと一緒に時間はまさに宝物となりました。南三陸町や石巻の瓦礫撤去、フィリピンの山岳民族が暮らすアエタ村でのボランティア、ノートルダム大聖堂復興支援、蔵王でのゼミ合宿、聖歌隊やダンス部の応援、学生クリスマス会、建学の精神を学ぶイタリア・フランス研修……。週8コマの講義は私にとって何ものにも代えがたく、キリスト教学の授業で「実は今日は誕生日で」と話すとワァーっと笑



仙台白百合女子大学 校舎

顔で拍手してくれるような心根の優しい学生たちに恵まれて、幸せをかみしめることの多い年月でした。

仙台白百合女子大学は、キリストの愛の精神に基づく教育を全国展開する白百合学園の高等教育機関です。世界5大陸40カ国にネットワークをもち、海外16大学と留学提携を結び、国際社会と連帯して地球市民を育てることを志しています。人間学部では「子ども教育」「心理福祉」「健康栄養」「グローバル・スタディーズ」の専門的学びによって、人類の幸福とよりよい世界の創造のために貢献できる社会人を輩出します。

「あなたは愛されるために生まれてきた」——この神様からのメッセージを確信し、東北唯一の四年制カトリック大学として“一人ひとりのいのちが輝くために”白百合は今日も希望の灯を灯します。2026年に創立母体のシャルトル聖パウロ修道女会創立330周年、仙台の地で開学60周年を迎えるに当たり、原点である「キリストの福音」に回帰し、ビジョン2030を掲げて力強く前進してまいります。四季桜が咲く自然豊かなキャンパスで若者が青春を謳歌し、よき師・よき仲間と出会い、人間的に成長して、自らの使命と希望を見つけることを願ってやみません。

シャルトル聖パウロ修道女会会員・

仙台白百合女子大学学長 加藤 美紀

2026年度より盛岡白百合学園は共学校に

カトリック学校は、それぞれ学校の建学の精神に基づいて教育活動を展開しています。盛岡白百合学園もその中の一校です。設立母体のシャルトル聖パウロ修道女会は、1696年フランスのシャルトル教区のルヴェヴィル・ラ・シュナール村のカトリック教会に派遣された主任司祭ルイ・ショーヴェ師によって創設されました。当時学ぶ場所もなく、誰からも学びの手ほどきを受けられない子ども達を目の当たりにしたルイ・ショーヴェ師のもとに、協力者とし

て集まった若い女性たちの献身的・姉妹的共同体(修道女)の活動が世界各国に広まり、日本には1878年3名のスールによって函館で始められました。続いて1881年東京に、そして1892年、私立盛岡女学校の校名で現盛岡白百合学園が設立されました。当時の日本の社会では、小学校を終えた女子は学校に行かず家事ができればよいとの考えが一般的だったということです。そこに問題を感じた土地の知識人等が「女子にも教育を」と教会のパリ外国宣教会の

神父様方に働きかけ、既に函館・東京で活動を始めていたシャルトル聖パウロ修道女会にスールの派遣を依頼し、学校設立の運びとなりました。



盛岡白百合学園中学高等学校 校舎（アンジェラスの鐘）

以来130年余、カトリック女子ミッションスクールとして、キリスト教的な人間観と倫理観を教育理念に掲げ、聡明な女性の育成を目指してきました。しかし、戦後の教育改革、そして近年の急激な社会構造の変化、価値観の多様化などにより、男女が均等にその利益を享受し、且つ責任を担うという考えが広く浸透し、それに伴い男女雇用機会均等法や男女共同参画社会基本法等の法制定も行われ、学園創立当初とは異なる社会状況となってきました。学園が岩手県唯一のカトリック校として、男子にも門戸を開き、引き続き多くの方々へ、カトリック人間教育の機会を開放するため、また、盛岡における社会



宗教の授業の様子

状況の変化（共学志向の増強、少子化による対象生徒の減少）へ対応するため、そして、教育の質の維持向上に向けて規模を確保するため、共学化に移行する決断を致しました。

今回の盛岡白百合学園中学高等学校の共学化は大きな変革ですが、本学園が女子教育を通して培ってきた教育の理念に変わりはありません。これまで通り、本学園の特色を活かしつつ、男子生徒にも門戸を開き、岩手県内唯一のカトリック校としての教育理念を提供し続けることができるよう全教職員一丸となって新たな学園造りに取り組んで参ります。今後も皆様からのご支援をよろしくお願い申し上げます。

なお、他の白百合学園姉妹校の共学化の予定は、現段階ではありませんので、よろしくお願いいたします。

学校法人 白百合学園

理事長 荻原 禮子

仙台白百合こども食堂

4月6日、カトリック元寺小路教会を会場に仙台白百合こども食堂がスタートしました。これまでも仙台白百合学園として、路上生活者の炊き出し支援、外国籍対象の日本語教室、地域のイベントボランティアに精力的にかかわってきましたが、白百合生から「地域の人たちのためにもっと何かできることをしたい」との声があがり、この度、仙台白百合学園独自で食堂を開設する運びとなりました。



活動の特徴としては、高校生がチラシ作成、児童館へのあいさつ回り、レクリエーション等を行い、仙台白百合女子大学健康栄養学科の学生たちがメニューを考案し、調理、提供するといったように高校生、大学生が主体的に活動に取り組むところにあり

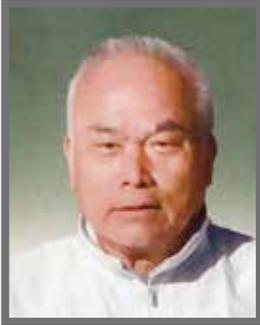


ます。（大人側のサポートは微々たるものです）。文字通り右も左もわからないまま手探りの状態での運営でしたので、近隣施設への挨拶一つ、

来場者とのコミュニケーションについてもかなり苦労した場面も多々ありましたが、来ていただいた方には概ね満足していただけたようでした。

仙台市内には若者から高齢者、外国籍の方々までつながりの乏しさや孤独の中で心細い思いをしている人たちが多くいます。そのような人たちのために、これからも若い力をもってできることを実践していきつつ、カトリック校としての拠り所である教会とのつながりを大切にしながら、地域の人々のためにこれからも行動を起こしていきたいと思っていますので今後とも皆様のお力添えをいただきたいと思っています。なお、2回目は9月に仙台市内の教会での活動を予定しています。

仙台白百合学園中学・高等学校 渡辺 顕一郎



首藤 正義 神父 (仙台司教区)

1946年8月25日 宮城県東和町米川生まれ
 1977年9月15日 司祭叙階
 1977年～ 元寺小路教会、白石教会、東仙台教会担当
 1988年～ ブラジル宣教。(アマゾン 28 教会にて5年間)
 1993年～ 会津若松教会、元寺小路教会、石巻教会、八戸塩町教会、鮫町教会、波打教会、本町教会、野辺地教会担当
 2014年4月～ 第1地区(弘前教会、黒石教会、五所川原教会、本町教会、波打教会)担当・地区長
 2018年4月 引退(司祭の家)
 2024年7月14日 帰天(満77歳)

葬儀は、7月20日仙台司教区カテドラル元寺小路教会大聖堂で、ガクタン エドガル司教と教区の司祭による共同司式で行われた。

アマゾンの宣教師 首藤 正義 神父

パウロ首藤神父の47年間の司祭生活のうち、アマゾンの宣教師として生きられた5年間に思いをはせ、この拙文を敬愛する宣教師の心にお届けしたい。

首藤神父の宣教の地は、アマゾン河中流、そこに流れ込む支流タパジヨス川との合流点にあるサンタレン教区であった。この辺りは支流とは言っても向こう岸が見えないほどの広がり、延長2000キロ近い大河である。この河川流域は無数の細い川が交差し、毛細血管のように血の通った大アマゾン生態系を形成している。その細流に沿って小さな集落が点在し、その中にある28の教会共同体を首藤神父は司牧用の船で巡回された。見渡す限りの水の世界を漂い、深い孤独に包まれて星座を眺める宣教師の姿が浮かび上がってくる。流域の茶褐色のアマゾン河と違い、クリスタルのように透けた紺色のタパジヨス川は美しく輝いているが、この川は深刻な社会問題を抱えている。タパジヨスの流域では金が採掘されていて、不法の金採掘者たちによって、砂金抽出に使用される水銀が川に捨てられ、川全体が汚染され、住民は「水俣病」に脅かされている。森林伐採も含めて、アマゾン破壊の裏には大企業も加担しているので、流域の住民の叫びは聞こえてこない。この現実の中で住

民を力づけるのが宣教師の役割である。彼は祈ることを知り、住民の力を信じ、心に夢を宿す。

5年後、首藤神父はアマゾンとその流域の住民を心に抱いて日本にもどった。宣教師はいろいろな活動体験の報告などを繰り返すが、心の奥を表現する言葉をみだせず、孤独に包まれている。それでも教皇フランシスコの『愛するアマゾン』を読むと、首藤神父の心が少し伝わってくる。「私の夢見るアマゾンは、最も貧しい人、先住民族、最底辺に置かれた人の権利のために戦うアマゾンです。彼等の声が聞き届けられ、尊厳が擁護されるアマゾンです」。彼が生涯抱きつづけたアマゾンの夢だ。その夢は流域の住民への学びを促す生涯の旅となった。小さく、素朴になろうと呼びかける巡礼。「アマゾンの住民は、わずかなもので幸せになり、多くを貯め込まずに神からのささやかな贈り物を喜び、無駄に破壊せず生態系を守っているのです」。

首藤神父さま、あなたは、あの時からいつまでもアマゾンの夢を心に抱く宣教者、旅人でした。今はキリストさまのうちに憩ってください。

堀江 節郎(釜石教会担当司祭・イエズス会)



アンドレ・レヴェイエ 神父 (ケベック外国宣教会)

1957年～1970年 十和田、弘前、浪打教会で助任司祭を務めた。
 1970年～2014年 カトリック三沢教会の主任司祭とカトリック三沢幼稚園の園長を44年間にわたり務めた。
 2024年6月16日 カナダのケベック外国宣教会本部にて帰天(満94歳)

葬儀は、6月28日(日本時間)カナダのケベック外国宣教会本部の聖堂で行われた。

仙台教区現勢 (2019年～2023年)

I 概況

※単位：km²

| 2023年 | 青森県 | 岩手県 | 宮城県 | 福島県 | 合計 |
|-------|-------|--------|-------|--------|--------|
| 面積 | 9,645 | 15,275 | 7,282 | 13,784 | 45,986 |

※単位：人

| | 2019年 | 2020年 | 2021年 | 2022年 | 2023年 |
|------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 人口 | 6,625,071 | 6,565,540 | 6,527,419 | 6,437,349 | 6,362,278 |
| 信者総数 | 9,794 | 9,822 | 9,653 | 9,359 | 9,076 |
| 受洗者 | 79 | 71 | 67 | 51 | 74 |

※信者総数は、IIの合計+IVの信徒総数の合計です。

II 聖職者・修道者・神学生

※単位：人

| | | 2019年 | 2020年 | 2021年 | 2022年 | 2023年 |
|----------------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 司教 | | 1 | 1 | 1 | 2 | 2 |
| 教区司祭 | 司祭 | 16 | 15 | 14 | 14 | 14 |
| | 助祭 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 |
| | 神学生 | 1 | 1 | 1 | 0 | 0 |
| 宣教会・ 修道会他司祭 | 邦人司祭 | 1 | 1 | 1 | 1 | 2 |
| | 外国人司祭 | 15 | 14 | 11 | 11 | 12 |
| | 外国人神学生 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 修道者 | 邦人修道士 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 外国人修道士 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| | 邦人修道女 | 174 | 163 | 140 | 134 | 127 |
| | 外国人修道女 | 6 | 6 | 4 | 3 | 3 |
| | 修練者等 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 在俗会 | 5 | 4 | 4 | 3 | 3 |

III 施設

| | 2019年 | 2020年 | 2021年 | 2022年 | 2023年 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 教会 | 52 | 52 | 52 | 52 | 52 |
| 巡回教会 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 集会所 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 男子修道院 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 女子修道院 | 22 | 18 | 16 | 16 | 15 |

IV 信徒の変動

※単位：人

| | | 2019年 | 2020年 | 2021年 | 2022年 | 2023年 |
|------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 信徒総数 | | 9,574 | 9,616 | 9,477 | 9,190 | 8,913 |
| 転入 | 教区内移動 | 18 | 29 | 26 | 21 | 25 |
| | 教区外移動 | 19 | 28 | 30 | 41 | 36 |
| | その他の理由 | 7 | 3 | 0 | 4 | 12 |
| 転出 | 教区内移動 | 23 | 30 | 27 | 13 | 20 |
| | 教区外移動 | 37 | 28 | 33 | 17 | 23 |
| | その他の理由 | 12 | 1 | 5 | 96 | 191 |
| 居所不明 | | 709 | 798 | 741 | 785 | 690 |
| 死亡 | | 134 | 125 | 114 | 151 | 160 |

※2022年,2023年の転出「その他の理由」には、10年以上居所不明のため転出扱いとなった方が含まれています。

| | | |
|---------|--------------|---|
| 〈用語の説明〉 | 小 教 区 | 教区司教によって設立された一定のキリスト信者の共同体です。教区司教が任命した主任司祭によって司牧され、少なくともひとつの教会堂を有しています。 |
| | 巡回教会 | 小教区に属し、定期的に司祭が巡回している常設の教会堂を指します。 |
| | 集 会 所 | 主に当該地域小教区の信者が定期的集まり、ミサや司牧活動の拠点となっている教会施設（聖堂以外でミサが年4回以上定期的にささげられている場所）を指します。 |

| 仙台教区本部 教 区 長：ガクタン エドガル 司教 司教総代理：小野寺 洋一 教区事務局長：イグナシオ・マルティネス | | | |
|--|-------|------------------------|---|
| 地区 | ブロック | 小教区 ()は巡回教会 | 担当司祭 ◎印は地区長 ()は所属 ▷は居住地 |
| 第1地区 | 弘前 | 弘前、五所川原、黒石 | 小松 史朗(仙台教区) ▷弘前 |
| | 青森・下北 | 本町、(松丘)、浪打、大湊、野辺地 | ◎李 錫ノイ ソク(韓国光州教区) ▷浪打 |
| | 三八 | 八戸塩町、鮫町、十和田、(五戸)、三沢、久慈 | パトリック・カストロベルデ(淳心会) ▷八戸塩町 アンリ・パディバンガ(淳心会) ▷八戸塩町 板垣 勤 協力司祭(仙台教区) ▷十和田 |
| 第2地区 | 盛岡 | 四ツ家、盛岡上堂、志家 | ポール・トー(ケベック外国宣教会) ▷四ツ家 |
| | 岩手中部 | 花巻、北上、水沢 | ◎マルコ・アントニオ・デ・ラ・ロサ(グアダルペ宣教会) ▷四ツ家 塩田 希 協力司祭(イエスの小さい兄弟会) ▷水沢 |
| | 岩手沿岸 | 遠野、宮古、釜石 | 堀江 節郎(イエズス会) ▷釜石 |
| 第3地区 | 岩手南部 | 一関、千厩、築館、(新生園) | 渡辺 彰宏(仙台教区) ▷一関 |
| | 三陸 | 気仙沼、大船渡、米川 | ロペス・ホセ・アウセンシオ(グアダルペ宣教会) ▷気仙沼 |
| | 宮城北部 | 古川、石巻 | ◎ヴァレラ・ミゲル(グアダルペ宣教会) ▷石巻 |
| 第4地区 | 仙台東部 | 塩釜、東仙台 | 森田 直樹(京都教区) ▷塩釜 |
| | 仙台西部 | 北仙台、西仙台 | ◎齋 鍾弼ノユ チョンピル(ドミニコ会) ▷北仙台 |
| | 仙台南部 | 一本杉、豊屋丁 | ギャリー・ゲストベオ(淳心会) ▷司教館 |
| | カテドラル | 元寺小路、八木山 | イグナシオ・マルティネス(グアダルペ宣教会) ▷元寺小路 高木 健太郎 協力司祭(仙台教区) ▷元寺小路 |
| | 県南 | 亘理、角田、大河原、白石 | 小野寺 洋一(仙台教区) ▷白石 |
| 第5地区 | 中通り北 | 松木町、(桑折)、野田町、二本松 | マチアス・アントニオ(エスコラピオス修道会) ▷野田町 グエン・カオ・トゥリ 協力司祭 (エスコラピオス修道会) ▷野田町 |
| | 会津 | 会津若松、喜多方、南会津 | 會津 隆司(仙台教区) ▷会津若松 |
| | 中通り南 | 郡山、須賀川、白河 | ◎佐藤 修(仙台教区) ▷郡山 |
| | 浜通り | 原町、いわき、(湯本) | 幸田 和生 名誉司教(東京教区) ▷原町 |
| <p>〈協力司祭〉佐々木 博、高橋 昌、佐藤 守也、川崎 忠紀 ※第2司祭の家の担当 シャール・エメ・ボルデュック(ケベック外国宣教会)▷二の森聖パウロ宣教センター</p> <p>〈引 退〉平賀 徹夫 名誉司教、土井 勝吾 〈療 養〉氏冢 和仁</p> | | | |

編集後記

シノドスのテーマ「ともに歩む教会」を目指すために、私たち自身の事を知ること大切です。今号では、初めて仙台教区の現勢の一部を掲載しました。参考にしてください。

仙台教区広報委員会では、皆様から原稿を募集しています。投稿は随時受け付けていますので、下記のアドレス宛てにメールで添付ファイルをお送りください。手紙の場合は教区事務所宛てに郵送してください。(関 毅)

c-hasegawa@blue.ocn.ne.jp

次号発行予定：11月 原稿締め切り：10月13日(日)